

Title	国家と集合的記憶：UAE建国40周年記念ロゴの謎
Author(s)	佐藤, 尚平
Citation	UAE=UNITED ARAB EMIRATES, 55: 7-11
Issue Date	2014
Type	Others
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/37648">http://hdl.handle.net/2297/37648</a>
Right	Copyright © 日本アラブ首長国連邦協会 UNITED ARAB EMIRATES-JAPAN SOCIETY   許可を得て登録

\*KURAに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社（学協会）などが有します。

\*KURAに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。

\*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者（学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど）に権利委託されているコンテンツの利用手続については、各著作権等管理事業者に確認してください。

# 国家と集合的記憶： UAE 建国 40 周年記念ロゴの謎

الدولة والذاكرة الجماعية: سر شعار الذكرى الأربعين لتأسيس دولة الإمارات

金沢大学人間社会研究域法学系准教授

佐藤 尚平

## はじめに：7 人目の首長

最近アラブ首長国連邦を訪れた人なら、一度は右の図柄を目にしたことがあるだろう。画面の中央の色鮮やかな UAE 国旗と、下にならぶモノクロの厳かな男性たちの対照が印象的である。アブダビでもドバイでも、街を歩けば至る所でこの図柄を見かける。官庁などの公的機関はもちろん、工事現場の壁や料理屋でも。

しかし例えば食堂の入り口にこのロゴがあるからと言って、UAE 料理を出す店だとは限らない。ロゴを横目に扉を開けて席に着くと、聞こえてくるのはアラビア語ではなくてウルドゥー語だということもよくある。あるいはパシュトゥン語、ヒンディー語、マラヤラム語かもしれない。タクシーの運転手の方から教わった表現でたどたどしくレンズ豆のカレーを頼み、建設工事の喧噪が聞こえる中むしゃむしゃほおぼる。「ああ、UAE に来たなあ」と心が満たされていく。

お腹がふくれたら、甘いお茶でもすすりつつ食堂を出て、もう一度ゆっくり図柄を見てみよう。これは、UAE 建国 40 周年を祝して公表された有名なロゴである。本誌の表紙に採用されたこともある<sup>1</sup>。2011 年以降、年が変わるごとにロゴの左下にある「40」という大きな数字が、「41」から「42」へと更新され、繰り返し使用されている。1971 年の建国から数えて、40 周年、41 周年、42 周年というわけだ。数字の右にあるアラビア語と英語は、上から順にそれぞれ「連邦の精神」「建国記念日」「アラブ首長国連邦」を意味する。文法上言葉が変化するのでやや分かりにくいのが、「連邦」あるいはそれを想起させる言葉がアラビア語 (ittihad; muttahida) と英語 (union; united) でそれぞれ二回繰り返されている<sup>2</sup>。しかも、「連邦の精神」という句が最も大きな文字で書かれている。どうやら、「連邦」という単語を最も強調したいようだ。なぜだろうか。

さらにロゴの中央に視線を移すと、伝統的な衣装に身を包んだ男性たちが並んでいる。数えてみよう。7 人だ。ここでピンとくる人もいるだろう。UAE は 7 つの首長国から構成される連邦だから、7 人はそれぞれの首長国と何らかの関係があるはずだ。そう言えば、中央に立つ人物は、建国の父、ザーイド首長に見える。ははん、UAE



が建国された時の 7 人の首長か。さらに、この図柄の原案になった写真があることも思い出す人もいるかもしれない。実はちょうど建国の日、この図柄とほぼ同じ写真が撮られているのだ。

下にあるのが、その写真である (写真 1 参照)。うん、間違いない。旗に色を付けたりと多少の美的な加工は施してあるが、基本的に同じものだろう。



写真 1 (出典: Hamdi Tammam, Zayed bin Sultan Al-Nahayyan: The Leader and the March, 1981, p. 115. - 1971 年 12 月 2 日撮影)

実際、筆者もそのように思っていた。どこかモヤモヤしたものを抱えつつ。この違和感は何だろう。UAE建国の経緯を考えると、あの日、1971年12月2日、7人が仲良く揃って写真を撮るはずがないのだ。何かがおかしい。もう一度、ロゴと写真を良く見比べてみよう。右から一人ずつ7人を照らし合わせていくと、最後の1人、左端の人物がやや違うではないか。この7人目は誰だ。なぜ、写真とロゴとで、7人目が入れ替わっているのだ。そして、このロゴの不思議な魅力、外国籍の労働者が忙しくビルを建て続けている UAE各地に貼られている絵柄の魔力はどこからくるのだろうか。

## 1. UAEの建国とラース・アル・ハイマの合流

建国記念日の写真とロゴとで、なぜ7人目の首長が入れ替わるのか。この謎を明らかにするためには、UAE建国の歴史をひもとく必要がある。そもそも UAE を構成する7つの首長国は、20世紀中葉まではイギリスの強い影響下にあった。7つの首長国とは、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマーン、ウム・アル・カイワイン、ラース・アル・ハイマ、フジャイラである。イギリスは一世紀半にわたってこの地域の軍事権と外交権を握っていた。そして第二次世界大戦を経て、1968年、ここから軍事的に撤退することを宣言する。

イギリスが撤退するとなればめでたく UAE が建国されるかと思いきや、そうではない。実は、イギリスは UAE の7首長国以外にもバーレーンやカタールの2ヶ国も影響下におさめていたのである。つまりイギリスの影響下で9つの保護国が並立していたのだ。そのイギリスが撤退するとなった今、9つの保護国はどのような形で独立するのか。ここから4年間に渡って交渉が繰り返されることになる。逆に言えば、7首長国がまとまって UAE となり、その他の2ヶ国がそれぞれ別個に独立してバーレーンとカタールになるという「3国独立」への流れは、当初は全く自明なものではなかったのである。9保護国でまとまって一つの連邦をなそうという「1国独立」案がかなり真剣に模索された時期もあったのだ。この交渉過程については、浦野起央氏が先駆的な研究を行い、堀抜功二氏が分かりやすくまとめている<sup>3</sup>。以下では、UAE 建国40周年ロゴの謎を解くという点から重要な部分をみていこう。

撤退宣言から3年半の紆余曲折を経て、1971年7月、「3国独立」案がようやく着地点として見えはじめる。そして7月18日、UAEの成立と暫定憲法について関係首長らが合意に至るのだ。

しかし、実はこの時点では、UAEに参加することに合意したのは6人の首長だけである。アブダビとドバイの二強体制を固定化する暫定憲法を嫌って、UAEに参加することを強硬に拒んだ首長が一人いる。ラース・アル・ハイマの首長、サクル・ビン・ムハンマド・アル・カーシミーである。ここからサクル首長の猛追が始まる。

たしかに7月18日の時点で「3国」独立への流れが決

定的になっているかにも見えたが、対抗するサクル首長にも勝算はあった。一つは、石油採掘の可能性である。当時、アメリカの石油会社ユニオンがラース・アル・ハイマで採掘調査を行っており、アブダビに対抗する石油収入が入ることが期待されていたのだ<sup>4</sup>。もう一つは、名家としての誇りと自信である。鈴木英明氏の論考にあるように、イギリスが来る前はこの地域の筆頭勢力だったのはカーシム家である<sup>5</sup>。そしてこのカーシム家の系譜を引くのが、シャルジャと並んでラース・アル・ハイマである。この民族自決の時代、カーシム家の由緒正しい系譜をもって国家と認められない訳がない。サクル首長はそう考えた。はっきりと言えば、これはアブダビに対する対抗意識である。さらに小串敏郎氏は、この時期 UAE が抱えていたイランとの領土問題の影響も指摘している<sup>6</sup>。

後に UAE 建国の父となるアブダビのザイド首長については UAE 現地から網羅的な研究が発信されてきたが、ザイド首長とサクル首長の複雑な過去に言及することは敬遠される傾向にある<sup>7</sup>。しかし、両者の関係を注視していた当時のイギリスの外交官や軍人が生々しい記録を残している。例えばサクル首長が「人々はザイド首長を愛しているのではない。彼が施すお金を愛しているだけだ」「ザイド首長が嫌いだ」「機会があれば一発やってみよう」と漏らしたと記した文書もある<sup>8</sup>。一方のザイド首長にしても、サクル首長を良く思っていなかったようだ。「自信過剰だ」「カタールとドバイの首長の手先として利用されただけだ」と<sup>9</sup>。

こうしたライバル関係もあって、サクル首長は UAE とは別の道を模索する。アブダビに国が作れて、名家カーシム家の率いるラース・アル・ハイマが国として認められない道理はない。つまり、UAE、バーレーン、カタールにラース・アル・ハイマを加えた「4国独立」こそが目指すべき道なのだ。そう考えたサクル首長は、UAE に対抗すべくイギリスとアメリカに承認を求める。

しかし、サクル首長に対するイギリスの評価は極めて低いものであった。曰く、「カーシム家の過去の栄光にすがって息巻いている」<sup>10</sup>。曰く、「何を考えているのか分からない。いくつもの問題を混同する。マスカットに行くための従者11人を数える時に、【自分の両手の指10本から数えて】パレスチナ人の秘書の太い指まで使う」<sup>11</sup>。偏見がにじみ出た表現からは、いかにイギリスがサクル首長の独立要求を真面目に取り合うつもりがなかったかがうかがえる。

イギリスから手応えを感じないサクル首長は、9月に入るとアメリカとの交渉を始める。アメリカは、ウィルソン大統領以来「民族自決」を標榜し、イギリスの帝国主義的な政策を幾度となく批判してきた。となればサクル首長の言い分を聞き入れるかと思いきや、アメリカは極めて冷淡な対応をとる。サクル首長は、ソ連も興味を示しているという冷戦下の小国が行う典型的な駆け引きも試みたが、アメリカは取り付く島もない<sup>12</sup>。いかに脱植民地化の時代と言えども、はじめに超大国や旧宗主国

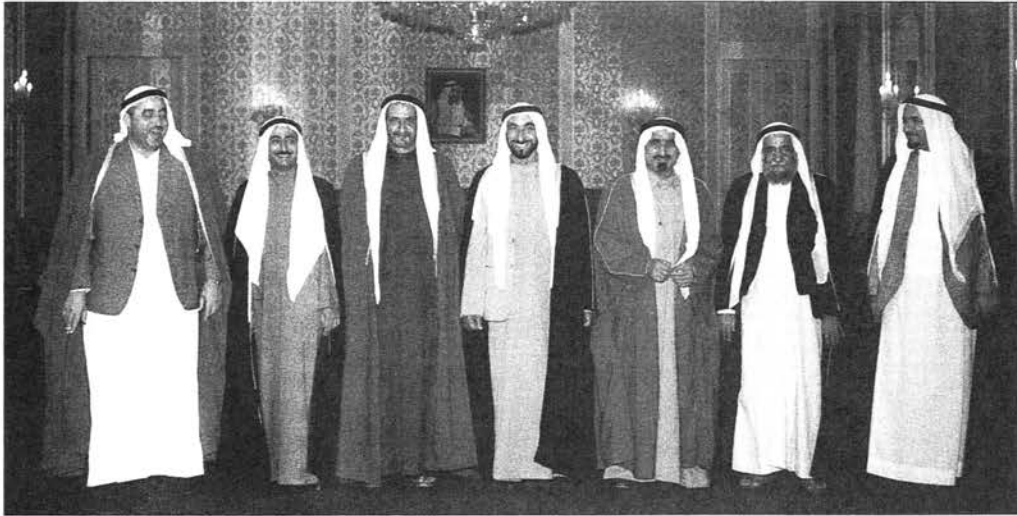


写真2 (出典: Tammam, Zayed bin Sultan Al-Nahayyan, p. 116-117.)

と一定の協調関係になれば、そもそも独立の議論の俎上に立つことすら出来ないのだ。

UAE建国の写真が撮影されたのは、このようにサクル首長が単独独立を夢見て全力で交渉を進めていた時である。だからこの記念写真にサクル首長が加わっていることは不自然なのだ。

結局サクル首長が諦めてラアス・アル・ハイマがUAEに合流するのは、翌年、1972年2月のことである。上の写真2は、その時に撮影されたものである。この右から3番目の人物こそ、何を隠そうサクル首長である。

## 2. ロゴ作成の経緯

もう一度ロゴと二枚の写真を良く見比べて欲しい。ロゴは基本的に写真1を元にしていて、写真1の左端の人物は消去され、代わりに写真2の右から3番目の人物がロゴの左端に加えられていることが分かる。

実は、このようなすり替えが行われたことは何も極秘情報ではない。例えばウェブサイトでも報じられている<sup>13</sup>。なぜ公然の事実が浸透していないのかという問題については後で考えるとして、まずはこのロゴが作成された経緯を明らかにしよう。

今回、ロゴの作成で中心的な役割を演じた二人の人物から話を聞くことができた<sup>14</sup>。一人目はロゴの原案を考えたムハンマド・アハマド・ムハンマド・アハマド・アル・マズルーイー氏で、もう一人は原案を元に写真の具体的な加工を行ったアマル・バシース・アル・ナイミー氏である。先述のウェブサイトは、ナイミー氏に対する取材をまとめたものである。まだ実証性に課題は残るが、筆者による二人へのインタビューとウェブサイトの情報を照らしつつ、ロゴ作成の経緯を再構成したい。

まず、アル・マズルーイー氏によると、ロゴのアイデアを初めに思いついたのは、建国40周年のほぼ一年前、2010年10月頃であった。アブダビの政府機関でアブダビのイメージ戦略を担当していた彼は、同僚と会話をしている時に、建国記念日の国旗掲揚の場面を何か形に出

来ないかと考えた。とりえあえず思いついたアイデアをティッシュに描いて、一応上司に伝えた後、そのまま机の中に入れたという。こうして彼の何気ないアイデアが描かれたティッシュは、そのまま彼の机の中で一年近く眠り続けることになる<sup>15</sup>。

ところでこの時点では、アル・マズルーイー氏も、例の有名な写真(写真1)に実はラアス・アル・ハイマのサクル首長

が映っていないことを知らなかった。逆に言えば、彼にとっては、建国の日の写真はすでに「連邦」の象徴だったのである。

そして2011年10月頃、事態は急展開する。建国40周年記念の式典を控えた大統領府の関係者が、式典に使える新しいロゴはないかと訪ねてきたのである。皮肉なことに、この時、アル・マズルーイー氏は自身の肩の手術のためドイツに渡航していた。しかし機転を利かせた同僚がアル・マズルーイー案を提出し、その後、採用が決まる。その後、上層部からの指示によって、7人目の写真を入れ替えることになったという。この上層部の人間が誰だったのか、元々の大統領府の意図は何だったのか。その意思決定過程はどのようなものだったのかなど、まだ不明な点は多い。

ともあれアル・マズルーイー氏の案が採用されると、今度はこれを公的な使用に耐える図柄にする作業に移る。ここでアル・ナイミー氏が登場する。画像処理を得意とする彼女は、フォトショップとイラストレーターを駆使して写真1と写真2を合成した上で美的な加工を施し、ロゴを完成させた。彼女が果たした役割は概ね技術的なものだったようで、「連邦の精神」という言葉を入れることも彼女の案ではなかったという。

こうして洗練された加工を施されてロゴは誕生した。今日、このことは秘密ではない。それにもかかわらず、このロゴは1971年12月2日の「史実」をあらわすものとして受け入れられている。筆者自身、初めにロゴをみた時には特に気にもせずそのような解釈をし、UAEの専門家の多くもそのように捉えたようである。ロゴのイメージ、「連邦の精神」がこれほどまで広く浸透していることは、一体何を意味するのだろうか。

## おわりに：国家と集合的記憶

以上、建国40周年記念のロゴに隠された謎を追ってきた。建国記念日の写真は、きれいに加工されて「7人の首長」が揃ったロゴとなった。ロゴの制作過程、そしてこのロ

ゴがこれほど一般的になっていることは、何を意味するのだろうか。

このロゴの魅力は、一言で言えば、その包摂力にある。このロゴは、長らく UAE の課題となってきた二つの不協和音を包み込む役割があるのだ。一つは、UAE 建国過程におけるアブダビとラアス・アル・ハイマの関係に代表される各首長国同士の様々な不協和音である。色鮮やかな UAE 国旗の下で7人の首長が勢揃いした図柄からは、かつての熾烈なライバル関係は感じられない。さらに「連邦」に類する言葉が繰り返し使用され、UAE が確かに連邦として確固たる一体性を保ってきたという集合的記憶を構築するのだ<sup>16</sup>。

これが記憶する対象たる過去に向かう包摂力だとすれば、もう一つの包摂力は、記憶をする主体に向かう。記憶をする主体とは、UAE に生きる人々である。建国40周年記念ロゴが、UAE 国民がおそらく一人もいない料理店でも掲げられていることは、この文脈で理解することが出来る。話は少し抽象的になるが、国と記憶との関係について考えよう。

国家と集合的記憶との関係は、国民意識の醸成や国民統合という文脈で論じられることが多い。たしかに、国民の輪郭と国家の形が概ね重複する地域においては、国民としての意識を定着させることが、国家のイメージを市民に浸透させることに直結する。こうした地域では、教育を通じて国民の集合的記憶を育てることも、国を統治する上で効果的な戦略である。日本で教育を受けた読者は、自分が習った歴史の授業を思い浮かべれば分かりやすいだろう。桜井啓子氏や松尾昌樹氏は、このような視点から UAE 周辺地域で使用されている教科書についての先駆的な研究を行ってきた<sup>17</sup>。

しかし周知の通り UAE では、地域にもよるが外国籍が市民の大多数を占める。国民の輪郭と国家のありようとの間に大きなずれが存在するのだ。こうした状況にあつては、「国民」としての意識を醸成することと並んで、自国民と外国籍の人間の両方を内包するような大きな枠組みとしての国家のイメージを浸透させることも重要な課題となる。UAE の教育を受けない外国籍の市民にも国家の枠組み、7つの首長国からなる連邦制を受容させるには、彼らのほとんどが読む機会のない教科書よりも、建国40周年記念ロゴを街中に貼る方が効果的だ。これならば、国籍に関係なく、UAE に暮らす者ならば誰もが目にするからだ。これは、国民統合というよりは、まずはその外側の国家の枠組みを浸透させようという作業である。あるいは複雑な歴史的な展開の中で何度も塗り重ねられてきた多層的な国民意識や自他の認識を持つ国とも、事情は異なる<sup>18</sup>。UAE が現在進行形で取り組んでいる二重の包摂という課題、それを如実にあらわしているのが建国40周年記念のロゴなのだ。

## 謝辞

本稿の執筆にあたっては、新井登氏、松原直美氏、堀抜功二氏、宮崎匠氏、吉村武典氏、Mariam Sultan Al Mazrouei 氏、Maitha Salman Al Zaabi 氏、Shareena Said Al Qubaisi 氏、Aisha Bilkhair Abdulla 氏に多大なご協力を頂いた。匿名の査読者からも大変有意義なコメントを頂いた。また、本研究の調査の一部は日本学術振興会科学研究費(25-9266)の助成を頂いて行われた。深く御礼申し上げる。

- 1 『UAE』、第51号、2012年。
- 2 本稿では特殊な転写文字は使用しない慣例があればそれに従い、また関係者自身による転写があった場合にはそれに従った。
- 3 浦野起央『資料体系：アジア・アフリカ国際関係政治社会史』第3巻、中東Ⅲ、パピルス出版、1980年、493-496頁；堀抜功二「アラブ首長国連邦の成立：産油国の近代国家建設」細井長(編)『アラブ首長国連邦(UAE)を知るための60章』明石書店、2011年、41-44頁。本稿では、参考文献は日本語で読めるものを優先的に紹介する。
- 4 Various documents, c. February–October 1971, FCO 8/1782, The National Archives, Kew, UK (TNA).
- 5 鈴木英明「『カワーシム海賊』の創造とパクス・ブリタニカ」『UAE』、第51号、2012年、27-29頁。
- 6 小串敏郎『王国のサバイバル：アラビア半島300年の歴史』日本国際問題研究所、1996年、420頁。
- 7 例えば、Jayanti Maitra, *Zayed: From Challenges to Union*, Abu Dhabi: Center for Documentation and Research, 2007.
- 8 'A Talk with the Ruler', by Ash, 4 March 1969, WO 337/18, TNA.
- 9 Bahrain to the FCO, 20 August 1971, FCO 8/1563, TNA.
- 10 Dubai to FCO, telegram no. 217, 16 July 1971, FCO 8/1561, TNA.
- 11 'Dubai and the Northern Trucial States: Annual Review for 1970', by Bullard, 10 December 1970, FCO 8/1510, TNA.
- 12 Department of State to Dahrhan, 'US Support for Ral al-Khaimah', 24 September 1971, RG 59, Subject Numeric Files, 1970-73, Box 2632, POL, TRUCIAL ST., National Archives and Records Administration, College Park, ML, USA (NARA).
- 13 Alrams.net ウェブサイト (<http://forum.alrams.net/showthread.php?t=291131>)、2013年2月21日最終アクセス。
- 14 Telephone interview with Amal Basis al-Naimi, 6 January 2014; Telephone interview with Mohammed Ahmed Mohammed Ahmed Al Mazroui, 7 January 2014. 後者の氏名の表記は本人からの申告による。
- 15 アル・マズルーイー氏によれば、テレビ局のアル・ダフラによってロゴのアイデアは一度画像にされた。この時は、写真1のロゴに比べて首長らがほぼ半分の高さにされていたという。このテレビ番組については未確認である。
- 16 集合的記憶については、佐藤健二「集合的記憶」『歴史学事典』第15巻、弘文堂、2008年、298-300頁。
- 17 桜井啓子『革命イランの教科書メディア』岩波書店、1999年；松尾昌樹『湾岸産油国：レンティア国家のゆくえ』講談社選書メチエ、2010年、117-145頁；同『オマーンの国史の誕生：オマーン人と英植民地官僚によるオマーン史表象』御茶の水書房、2013年。
- 18 長沢栄治『エジプトの自画像：ナイルの思想と地域研究』東京大学東洋文化研究所、2013年、132-151頁。